
変質恋愛白書

I f

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変質恋愛白書

【Nコード】

N3971F

【作者名】

If

【あらすじ】

普通の恋じゃない。ここにいる彼や彼女は少し変わった人達。だけれども本当は変わってるんじゃないくて、誰よりも純粋なんだ。このお話たちは、恋をするちよつと変わった少年少女のお話。

第一話 イチズなカレ（前書き）

この小説は連載扱いとなっておりますが、正しくは『連作短編』です。ただ、連作短編といっても主人公は変わってしまうのでやっぱりただの短編シリーズなのではないかと思えます。いずれにせよ、第一話から読む必要は全くありませんので、好きに読んでください。

第一話 イチズなカレ

私のカレはイチズなのだと思う。

とても気を使うし、優しく接してくれる。

その為になら積極的に動くし、一時も彼の頭から離れることはない。

私のカレはとてもイチズなのだ——野球に対して。

カレ——敬人君は真正銘の野球バカだ。

カノジヨの私と野球を天秤にかけたら間違いなく私の方が軽くなってしまう。

私の立場は間違いなく野球の下に来るのだ。

例えば、夜にメールしてる時なんかは——

『ねえ敬人君、明日一緒に学校行こっ』

『悪い、朝練があるから……』

うーん、朝早く学校行ってもやることないし……

雨の日の放課後なんかは——

「敬人君、一緒に帰ろ」

「ごめん、筋トレしてから帰るから……」

「……」

……筋肉のバカ。

私の誕生日に至っては——

「ねえ、今日私の……」

「ああ、誕生日だろ」

そう言つて敬人君はバッグからプレゼントらしき物を取り出す。
彼からそれを受け取り、私はワクワクしながらプレゼントを開け
た……が、その中身を見て、思わず聞かすにはいられなかった。

「……これ何？」

「何つて……グローブ」

「……………」

……カノジヨまで洗脳させる気か！

まあ、そんな訳で敬人君はいつ何時も野球のことばかり考えてい
る。

だけど私はそんな敬人君が大好きなのだ。

健気に野球に打ち込む敬人君がかつこよくて仕方ないのだ。

私はそんな彼を見て、日曜日から始まる最後の大会で是非とも活
躍して欲しいと、陰ながらに祈るのだ。

一回戦、のっけから相手は強豪校であった。

もの凄く速いボールに目が追いつかず、うちの学校は手も足も出
なかった。

四番である敬人君も二打数ノーヒット。だけど、段々タイミング
は合ってきていると思う（シロウトだからよく分かんないけど……）
。

だけど、そうこうしているうちに最終回、点差は五点差。ツア
ウトの状況で敬人君に順番が回ってきた。

この試合で初めてのランナーを背負ったのにもかかわらず、マウ
ンド上のピッチャーはまだ余裕の表情だった。

せめて一点でも取って欲しい……。

いつの間にか、私は胸の前で手を組み、祈っていた。

そんな私には目も向けず、敬人君は緊張した面持ちで打席に入っ
た。

まだ夏とはいいがたい、中途半端な暑さの日差しがグラウンドを

照り付ける。

「敬人君……」

思わず嘆きの声が漏れる。だからといって時間が止まるわけではない。

マウンド上でピッチャーがセットポジションに入り、ボールを投げた。

スパアン。

目にも留まらぬスピードでボールがキャッチャーのミットに吸い込まれていく。

審判の右手が上がり、スコアボードに黄色いランプが灯る。

二球目はスピードこそ遅いものの、大きな変化をしながらキャッチャーのミットにおさまる。

あつという間にツーストライク。あと一球で試合が終わってしまふ。

敬人君は一旦打席から外れ、二回、三回と素振りをする。スイングはどこかぎこちなく、心なしか、顔も強張っているように見えた。彼は打席に入る前にスタンドを見渡す。そして、私と目が合った。私は組んでいた手に一層力を入れて、言葉を発した。

「頑張つて！」

そんな安直なことしか言えない。

だが、敬人君は帽子のつばを触って打席に入った。

——帽子のつばを触ったら、了解のサイン——

昔、敬人君からそんな事を聞いたことがある。

敬人君の顔からは固さがとれ、笑顔が窺えた。

私の言葉が届いた。

無意識の内に私はそう思っていた。

そして、ピッチャーがサインに縦に首を振り、第三球を投げた。唸りを上げながらもの凄いスピードでミットにボールがおさ——

カアン。

金属音と共に、スタンドの誰しもがが一斉に立ち上がる。

ボールは大きな弧を描いてから、レフトとセンターの間を転々と転がった。

敬人君はボールの行方を一切見ずに走る！

彼が二塁ベースを回っても、外野はまだボールに追いつかない。スタンドは更に沸く。ランニングホームランの期待が、彼らをそうさせているのであった。

一塁ランナーがホームベースを踏んだ時に、レフトがようやくボールに追いついた。

「回れ！」

三塁ベースを踏む直前でベースの近くにいた味方^{ランナーなんか}が叫ぶ。それを聞いて、敬人君は三塁ベースを回った。

その間に、外野から内野へとボールが返される。敬人君は必死の形相でホームへと走る。

タイミングはたとえ玄人であっても二分化されると思う。

内野からの返球がキャッチャーのミットに収まると同時に、敬人君は頭から滑り込む。

砂煙がその場上がり、スタンドからは詳しくは見えない。

あまりの際どいタイミングに、私は思わず目を逸らし、そして、セーフであることを祈った。

だが、私が目を逸らした時点でその祈りは自らを無効としてしまった。

目を背けた時点で、私はその戦いの場から逃げ出したのだ。戦いから逃げ出した者の願いを叶えてくれるはずがない。

目を逸らさなければ、祈りは通じていたかもしれないのに……数瞬後、審判は右手を高く上げた。

教室に試験終了のチャイムが無慈悲に鳴り響く。

「ねえ、一緒に帰ろっ」

敬人君が引退してから三日後、私は意を決して彼に話しかけた。それまでは試験前であつたし、抜け殻になつたような敬人君に話しかけるのが怖かつたが、いつまでもその状態ではダメだと思い、勇気を出して誘うことにしたのだ。

「ん……」

敬人君の返事はあいまいだった。もしかしたら、聞こえてないのかもしれない。

「帰ろっ、ね」

「……ああ、今日は部活が……そうか、引退したんだっけ」
まだどこか野球に依存している。彼の夏はまだ終わってないのだろっ。

私はそれを断ち切るように彼の腕に手を回す。

「じゃあ、早く帰ろ」

「ちよつと、まだ準備が……」

今の敬人君の状態などお構いなしに、彼を廊下へと引っ張り出す。学校でイチャつくバカップルだと思われても構うものか。敬人君が笑顔を取り戻してくればそれでいいんだ。

「ほら、自転車で帰ろ。私後ろに乗るから」

「ちよつと待て！」

廊下を昇降口に向かって三十メートル程進んだ所で、敬人君は大声を出して私の両肩に手を置く。反射的に「きゃっ」と声を上げてしまった。

「なっ、何？」

真剣な表情の敬人君が少し怖い。

彼が口を開いた時、私は恐怖のあまり息を呑んだ。

「……チャリ鍵もバッグも教室に置きっぱだ」

「……はっ？」

「だから、教室に戻らないとチャリに乗れん。ここで待っててくれ」

敬人君はそう言い残して教室へと戻っていった。
全身から力が抜ける。
怒られるかと思った。

敬人君でなかったらきつと怒られていただろう。

私は敬人君に感謝すると同時に、自分の身勝手さを少し反省した。

「風が気持ちいいね」

「……………」

「……なんか反応してよ」

「……今は運転に集中している。静かにしてくれ」

「……もう」

そう言いながら私は頬を膨らます。

シャー、と音を立てながら私と敬人君を乗せた自転車は坂道を下っていく。

私は後ろの荷台に横向きに座り、慎重に運転する敬人君の体に腕を回す。

いつも坂を下る時は二人とも歩くので、この感覚は何だか新しい。
スピードは多少落としているものの、下り坂であるので景観が次から次へと変わっていく。

「あ、まどか。じゃあね」

私は同じクラスのまどかに手を振る。すると、まどかも手を振り返してきた。

「知ってる？ まどか、うちのクラスの澤田くんと付き合ってるんだよ」

「巧と？ 西野も物好きだな」

「そうだよな、何でだろうね……………あ……………海、見えてきた」

私はそう言っけキラキラと輝く海面を指差した。

坂を下りながら見る海は毎回見ても飽きない。

坂の上に建てられた学校だから、女子は自転車で来ようとは思わない。私もそのうちの一人だから自転車から見る海はいつもと違う感

じがする。

「ねえ、海行こうよ」

この坂を下りきればすぐ海に出る。

「海？ 水着なんか持ってきてねえぞ」

「別に海に入りたいわけじゃないよ」

まだ寒いし。

敬人君の夏はもう終わっちゃったけど、実際の夏はもっと遅くて、まだ蝉も鳴いていない。

坂を半分くらい下った。

海がどんどん大きくなる。

かすかに潮の香りがする。

「ねえ、行こうよ」

「……まあ、いいか。まだ午前中だし」

敬人君はそう言っただけ。

そして自転車は決して進路変更することなく、坂を下りきった。

——ザザアーン。

波の音が心地よく私の心に響く。

私と敬人君は特に気にもせず、砂浜に腰を下ろした。

空にはカモメが飛び交い、まだそれ程強くない日光が砂浜を照りつけていた。

平日の昼間なので浜辺には数組の親子連れしかいなかった。

「穏やかだねえ……」

波の音とカモメの鳴き声の他には何も聞こえない。もう十五年もこの地にいるが、こんなに静かな海には久しぶりに来た。

「海が綺麗だ……」

「……砂浜は汚いけどな」

「む……」

別に言わなくてもいいじゃないか。確かにゴミとかワカメとか打ち上げられてるけどさ。

耳を澄ますと、遠くから路面電車のチンチンという音が聞こえた。しばらく海を眺めていたが、何の変化も現れないので、私は勇気を振り絞って敬人君の肩に体を預ける。

「うおっ」

私の肩が触れた途端、敬人君は思わず声を出した。きつと初めてやることだから、ちよつとびつくりしたのだろう。でも、その後は何も言わずに私が彼に寄りかかるのを許してくれた。

顔がちよつと熱い。もしかしたら、赤くなっているかもしれない。敬人君もそれきり私を見ようとはしない。もしかしたら、彼も顔が赤くなっているのかもしれない。

私達はそのまま何をするってわけでもなく、ただその場で波の音に耳を傾けていた。

「お腹空いたね……」

「もう帰るか？」

「やだよ、まだ帰んない」

「じゃあ言つなよ」

敬人君は困ったような笑みを浮かべながらそう返す。

この、何でもないのんびりとした会話がとても久しぶりで、楽しい。

敬人君が引退してから初めて彼の笑顔を見た気がする。

私も彼の笑顔を見て微笑み、さっきまで以上に彼に身体を預けた。

「……試験終わったらデートしよう」

「そうだな、どこがいい？」

「山上公園かなあ……」

山上公園とは県内最大級の公園であり、デートスポットとしても非常に有名で人気のある公園である。

「山上公園か、いいね」

「……近くに野球場があるからでしょ？」

「……………」

敬人君は顔を赤らめて閉口する。どうやら凶星だったようだ。

「別に野球は見ないからねー」

私はあかんべえをしながら敬人君にそう告げる。

「マジでそれ勘弁……」

「やだよー」

両手で拝んで頼み込む敬人君を、私は笑顔で一蹴した。

ああ、私はなんて小悪魔なんだろうか。

日曜日はあつという間に来た。

洋服を三時間かけて選び、控えめに化粧をして敬人君の待つ駅前へと歩いて行った。

「敬人君！」

私は噴水前に腰掛けていた敬人君に声をかけて駆け寄る。すると、敬人君は手を挙げて噴水から腰を上げた。

「おはよう」

「おう」

「待った？」

「三十分くらいな」

……乙女心の分からん奴め。普通「今来たところ」とか言うよね？
何でこんなに正直なんだか……

私は彼に微笑んで「ごめんね」と言いながら内心でそう思う。

「さあ、行こっか」

「そうだな」

私は歩きながらさり気なく敬人君と手をつなごうとする――が、
幾度となく挑戦したけど、結局敬人君の手の温もりを得ることは出来なかった。

私達は最寄りの駅で降りると、ゆっくりとした足取りで山上公園へと向かう。

五十メートル歩いたかどうかの内に、ラッパとメガホンの音、そ

れに歓声が微かながら聞こえてきた。

それは山上公園に近づくにつれてどんどん大きくなる。よく見ると、ファンと思しき人も段々と増えていった。

そして、その数に比例して、敬人君の表情がしんみりとしていった。

「どうしたの？」

理由は分かりきっているのにもかかわらず、私は敬人君に尋ねる。

ああ、何て小悪魔チックなのだろう私は。

「いや……何でも……」

「……野球、見たいんでしょ？」

「……………いや」

全く、敬人君は嘘が下手くそだ。

敬人君の目はどう見ても球場の方に向いているし、私の問いにもかなりの間があった。

「じゃあ、見たくないんだ？」

「あ、当たり前だろ……デートなんだから」

敬人君がそう断言したのを聞いて、思わず顔がニヤけてしまう。

私は今敬人君がした一大決心を一瞬で崩してしまう秘密兵器をバッグから取り出した。

「——じゃあこれもいらないね。捨てちゃおうか」

私はそう言って秘密兵器——観戦チケットを掲げる。

それを見て敬人君は目に見えて揺らいだ。

「……それは勿体なくねえか？」

「そんな事ないよ。新聞屋さんから貰ったチケットだし」

嘘は吐いていない。実際にお母さんが新聞屋さんから貰ったチケットである。

敬人君はひどく汗を掻いていた。ついさっき「見ない」と宣言した以上、すぐに折れることは出来ない。

だけでも、私は知っている。

彼が「デートだ」と自分に言い聞かせても、それをカバー出来る

精神力がないことぐらい。

そして、彼は野球と私を天秤にかけた結果――

「……お願いします、野球を見させてください」

――やっぱり野球が勝つわけで……

でも、それでいいのだ。

私は野球に真剣な敬人君が好きなのだから。

試合開始直前に入場したせい、日曜日ということもあって球場には大勢の観戦客がいた。

「うわー、凄いね。席に座れるかな……」

「何を言っているんだ？ 応援は立ってするのが筋つてもんだろ」

「いや、『応援』じゃなくて『観戦』に来たんだからね……」

応援なんてしかたが分からないし。

「何を言う！ 応援しない野球観戦のどこが楽しいんだ！」

「……私のチケットで入ったんだよね？」

「……すいません、応援は控えさせていただきます……」

私は応援しようとする敬人君を黙らせ、たまたま二つ空いていた席に腰を下ろそうとする。

「えっ、そこ……見にくい」

「……文句ある？」

「……いえ、決してそのようなことはございません……」

いや、チケットの効果は絶大だな。今度からデートの時は必ずチケットを持つてくることにしよう。

私が席に腰掛けると同時に始球式なるものが始まり、それが終わると試合が始まった。

私はあまり野球のプレーに詳しくないので、一回毎に敬人君に説明を受ける。だけど、そんなことは全く頭に入ってこなかった。

一つ一つ、丁寧に説明する敬人君の真面目な表情がかっこよくて、そちらばかりに注意がいつてしまう。

結局私は終始野球より敬人君の方を見ていたのであった。

試合は敬人君が応援していたチームが勝ったこともあって、彼はまるで子供のように大はしゃぎしていた。

勝利が決定した瞬間なんか思わず立ち上がり、私の手を握ったりなんかして、ちよつとドキドキした。

二人で球場の外に出ると敬人君が私に話しかけてきた。

「大幅に時間くったけど……どうする？」

彼の言う通り、日は既に西に傾いており、まもなく沈むといったところであつた。

私は少し考えたふりをしながらやがて口を開く。

「……まあ、山上公園に行ってみようよ。ね？」

敬人君は「そうだな」と言つて頷き、駅の方へ向かうファンの群れから離れた。

ちなみに、ここまでは全て私の計算通りである。

公園には日曜日とはいえ日も暮れてきたのでまばらにしか人がいなかった。

「……また地元で見る海とは違うね」

「そうだな……」

私達は公園のベンチに腰掛けて海を眺めていた。

残念ながら夕日が海に沈むという幻想的な光景は見られないが、それでも十分だ。

私は海を見ながらもちらちらと敬人君を眺めていた。だが、彼から話しかけてくることは一向になく、ただ時間だけが過ぎていった。かもめの鳴き声が聞こえる。

そんなどうでもいいことを考えながら私は敬人君が話しかけてくれるまでずっと何も言わないつもりだった——のだが、このままでは日が暮れてしまうので、私は実力行使にすることにした。

「じゃーん……」

声だけ聞くと頭のおかしな少女に聞こえるかもしれないが、決し

て頭がイってしまっただけではない。私は奇妙な効果音と共にある物を敬人君の前に高々と上げた。

「これなーんだ？」

目の前の敬人君は私の持っている物と私を交互に見比べてから首を傾げた。

「……何でお前がこんな物持つてるんだ？」

「ん、今日キャッチボールやろうと思つて持ってきた」

私はそう言つてどうだといわんばかりに胸を張り、グローブをはめてみせる。

「いや、そういうことじゃなくて……」

「？」

どうということなの？

「……その、いつ買ったんだ？ そのグローブ……」

………はっ？

なんだ、敬人君は人にあげたプレゼントを覚えてないのか？

……ヤバイ、あまりの怒りのあまり、ちよつと目つきが悪くなつてゐるかもしれない。

予想通り、敬人君はどこか気まずそうな表情を浮かべている。

「え、ちよつと……俺、何かまずいことでも言つた……？」

「………呆れた」

私はしばらくの間沈黙した後、ようやく口を開いた。もしかすると、眉間にしわ寄つてゐるかもしれないな。

「えっ、どう……」

「これ、敬人君に貰つたのよね。誕生日の日に」

「あ……」

突然敬人君の顔が真っ白になったような気がする。もちろん、実際にはそんなことないんだけど。

「……私じゃなかったら、どうなつてたかな……」

私は少し含み笑いを浮かべる。

刹那、全ての状況を把握した敬人君はすぐさまその場に膝を着い

た。

「ごめんごめんごめんごめんごめんごめん……ん!!!」

……何か必死に謝ってる敬人君で、ちよつと可愛いかも……じゃ
ない、私はそんな心の内とは裏腹に、拗ねたようにちよつと頬を膨
らませる。

「どうしようかなー。こんなショッケなことないしなー」

私は小悪魔的な口調でそう言う。すると、目の前の敬人君はさら
に真剣な表情で謝り始めた。

「ごめん、ほんとごめん!! 何でもするから……」

その言葉を待ってたと言わんばかりに私は彼に喰らいつく。

「じゃあ、キャッチボールして」

「えっ、でも俺グローブないし……」

「許さないよ……」

「うぐっ……」

で、もちろん敬人君が頷かないはずもなく……

へろへろ〜パシ。

フワツ、ボス。

夕日に染まりゆく公園に白球が舞う。行きはへろへろと。帰りは
フワツと。当然、私が投げているのが行き。敬人君は手加減してフ
ワツと投げているのだが……

「……捕れない」

「ちゃんとボール見てるか? ずっと見てないと駄目だぞ」

敬人君はさっきのことをまるで忘れたかのように、笑顔でそう言
っている。

私はちよつと頬を膨らませながら、拗ねたようなふりをしてみせ
る。

へろへろ〜パシ。

フワツ、ボス。

紅に染まる公園でのキャッチボールはなんかロマンチックな感じ

がする。

私と敬人君は微笑みながら白球を通じて会話を続ける。

へろへろゝパシ。

フワツ、ボス。

「また来ようね。山上公園」

「ああ……」

へろへろゝパシ。

「俺な……」

受け取ったボールを返球しないで敬人君が呟く。

「ん、どうしたの？」

私の問いに少し躊躇したのが、しばらく間を空けてから彼は話を切り出した。

「野球……辞めようと思ってんだ」

「えっ？」

敬人君はそう言いながら吹っ切れたようにボールを返す。

フワツ、ボス。

「……何で？」

私はボールをグローブにおさめたまま、そう言う。これはキャッチボールをしながらできる話ではない。

もしかしたら、私の大好きな野球をやっている敬人君を見れなくなるのかもしれないから。

彼は真剣な私とは反して笑みを浮かべながら後ろ髪を搔く。

「ほら、夏の大会があっただろ。あん時な、俺とはレベルが違うって思ったよ。それで、高校じゃあやっていけないんじゃないかなって思ってた……」

私は知っている。

敬人君が浮かべている笑みの裏側で、唇を噛んでいることを。彼がまだ好きな野球を続けていたいということを。

あんな負け方をしたんだ。悔しいわけがない。それも、人一倍負けず嫌いな敬人君ならなおさら。

だけど、実力というものは残酷なもので彼はそれを夏の大会で知ってしまったのかもしれない。

だから……こんな……笑いながらも悔しそうに……

「ほら、中学野球で踏ん切りもついたら。だから……」

「よくないよ!!」

無意識の内に私はそう叫んでいた。

なんだか、目頭が熱い。

「どうした……?」

敬人君はそう言いながら首を傾げる。

「よくないよ! あんなに好きで一生懸命やってた野球を辞めるなんて、よくないよ……」

私はそう言いながら俯く。いつの間にか私の体がわなわな震えだしていた。

「そうは言っても……」

「よくないよ!!」

そう叫びながら、私の足元に涙が落ちていく。

止まって欲しいのに、それは留まることなく私の頬を流れた。

「お前、泣いてるのか……」

「来ないで!!」

心配そうに私のところへ寄ってくる敬人君を私は拒んだ。もしかしたら私はこの時初めて彼を拒んだのかもしれない。

「……野球をやってる敬人君がどっか行っちゃうのなんていやだよ

……」

私はそう言いながら目元を押さえる。たまらず、私はしゃくりあげて泣いていた。

不意にポンと頭を叩かれる。

潤んだ視界の中央に困った笑みを浮かべながら敬人君が立っていた。

「ごめんな、お前がそこまで俺のことを想ってるなんて思わなかった」

そう言いながらさらにポンポンと軽く頭を叩かれる。

「俺な、お前は野球やってる俺のことが好きじゃないんじゃないかって思ってた。きつと野球ばかり優先させてる俺のことが嫌いなんだろうって」

「……だから、野球辞めようって思ったの……？」

「ああ」

初めて本音を語ってくれた敬人君に、私は目元を拭いながら呟いた。

「……そんなことはないよ、私は野球をやっている敬人君が好きになっただもの……」

不意に、敬人君との距離がゼロになる。

刹那的に彼は私を抱きしめていた。

「それは野球をやめるわけにはいかないな……」

敬人君は私の耳元でそう囁く。

「俺、高校に入っても野球続けるよ。自分のためにも、お前のためにも」

そう言って彼は私の顔を胸に押し当てた。

私は彼の背中に手を回す。

「へへっ……もう少しで敬人君のこと嫌いになっちゃうところだった……」

「……それは危なかったな……」

敬人君の言葉を聞いて、私は彼に体をあずける。

敬人君の温もりがとても温かった。

それから半年後、敬人君は練習着姿で高校のグラウンドに立っていた。

私はジャージ姿でそれをベンチ横から見つめる。

中学の時は恥ずかしくてできなかったが、私は野球部のマネージ

ヤーになった。

だって、遠くから見ていただけじゃ物足りないから。

「さあ、行こうぜ！」

キャプテンが部員全員にそう声をかけると、個々が各ポジションに散らばっていく。

「頑張ってね！」

私もグラウンドに散らばっていく部員達に声をかける。

そして私は無意識の内に敬人君を見た。

不意に彼と目が合うと、敬人君は帽子のつばを触った。

それは紛れもなく『了解』のサイン――

第二話 電波的なカノジョ

「……あなたが私を殺しに来た刺客なの？」

夕暮れの屋上に佇む一人の少女。

俺は怯えた表情を浮かべる彼女に歩み寄りながら口を開く。

「それがどうした？」

あえて、自分の立場を伏せておく。もし立場を明らかにしたら次の瞬間に彼女がどんな行動をとるか分からない。

それにしても、何でこんなことになっているのだろうか？

高城 いろはは決して精神障害者ではない。むしろ、正常な人格の持ち主であると俺は思う。

だが、いろはと交流を深めていくうちに、彼女にとんでもない奇癖があることを思い知った。なんというか、だんだんと付き合いが深くなっていくごとに彼女は突然周囲のことが見えなくなる。

そして性格が一変し、彼女は何かを演じ始めるのだ。

だから俺はいろはのことを密かに「電波的なカノジョ」と呼んでいるのだ（もちろん、本人にはいえないけど）。

いろはは毎回違う人、シチュエーションを演じ、俺はいつしかそれに巻き込まれるようになった。

彼女はもともとそんなに他人と付き合いたりはしない。なんといつか、他人に興味がないという感じなのだ。そんないろはが唯一興味を持ったのが俺のようだ。

何はともあれ、俺はいろはの身勝手な「演劇」を演じているのである。

さて、過去を振り返ってようやく思い出した今回の設定。

おそらく状況から見て、過去に一度演じた『転校生は刺客！？』かと思われる。

確かあの時は演技をミスって……。

今度はミスらないようにと注意しながら言葉を紡ぐ。ちなみに台本たるものは一切渡されてない。台本はいろはの頭の中にあり、その演技はOKか否かはいろはだけが知っている。

そんな演劇に、いろはの思考を考えながら全てアドリブで演じているのは結構すごいと思わないか？ まあ、一度もエンディングにたどり着いたことはないのだが……。

さて、そんな俺の思考とは裏腹にこの演劇は続く。

「やめて！ 近寄らないで！！」

彼女はそう叫ぶが、俺は決して立ち止まることはなく、彼女に迫る。いろはの性格的に、ここは止まっちゃダメなところだ。

「何故止まる必要がある？ 止まらなくてもいいじゃないか」

我ながらに中々凶悪だとは思うが、これで正解のはずだ。

その証拠に彼女の演技もまだ終わっていない。それどころか、むしろヒートアップしている。

「何で私なの！？ 私じゃなきゃダメなの！？」

「それがどうした。特に気にすることではないだろう」

そう言いつつ一歩一歩彼女に歩み寄る。俺が近づくに連れているのは表情に恐怖が増す。

夕焼けは校舎に影を落とし、まもなく星が瞬こうとしてる。

山の稜線に陽が隠れようとした頃、ようやく俺はしばらくの沈黙を解いて呟いた。

「……さて、もう終わりにしようか……」

そして俺が彼女に近付こうとした時――

「……終わり」

――突如、二人の渾身の演劇は終わりを告げた。

そしていろはは何を言うわけでもなく、屋上を後にする。

「……何でわざわざこんなことして学校で夜を迎えなきゃならねんだ？」

俺はそう呟いて、今日こそはクリアできると思っていたゲームが突然ゲームオーバーになった落胆を隠し切れずにその場に膝をついた。

「……昨日は何が悪かった？」

次の日の朝のHR前。

答えてくれないとは分かっているながらも、俺は前の席で教科書を出し入れしているいろはに尋ねずにはいられなかった。当然彼女は答えてくれず、それどころか聞こえないふりまでする始末。俺はそれを見て溜息を吐かずにはいらなかった。

「少しは私の身になって考えなさいよ。それじゃあ将来教師にならないわよ」

「げっ、何でそんなこと知ってんだ？」

「私は興味がわいたものは徹底的に調べることにしてるの。あんたもそうしてみれば？」

さすがにそこまでする気にはなれない。てか、男子が女子を調べまわしていたら完全にストーカーじゃないか。

「もし本気で教師になりたいのなら、まずは相手の身になること。それが出来なきゃ教師は務まらないわよ」

「……………」

「どうした？」

「いや……………」

正直これは驚いた。というのも、いろはがここまで饒舌なのも珍しいからだ。俺と一緒にいるときでも、こんなに話したりはしない。

「お前の身にね……………正直、考えたことなかったな」

「やっぱりね、それだったら納得だわ」

「？ 何が納得なんだ？」

「……………いや、なんでもないわ」

何だ？ 何が納得なのかがさっぱり分からないぞ。

「そつえば、お前の将来の夢って何なんだ？」

唐突にそんなことを思いついて、俺は口に出した。

「ちよっ、そんな詮索しないで！」

「えっ、詮索って？ あ、ちよっ……」

いろははそう言って走り去っていく。おいおい、五分前になってどこ行く気だ？

それにお前が興味わいたら調べろっていったんだろ？　なのに何で……。

俺は首を傾げ、さんざん言われた「相手の身になる」っていうのを実行してみたのだが、どうやらスキルが足りないらしく、無駄な努力と終わった。

その後、いろはは無事に教室へと戻ってきたのだが、俺の言葉を一言も耳に入らず、その日の授業が終わった。

その夜、いろはから一通のメールが来た。中身は実に淡々としており、必要最低限のことしか書かれていなかった。それにしても、あいつはもう少し女の子らしさを出せないものかね。例えば絵文字使うとか……。

まあ、単純明快でいいんだけどね……。

「明日、十時に森林公園で待つてる」

待つてると言われて行けないわけねえじゃねえか。俺はこの時間から逆算して明日は休みなのにも関わらず学校に行くよりも起床時間が早いということを知ると、一つ嘆息してベッドに入った。

森林公園は町の外れにある山に隣接した公園である。だから俺の家からはやたら遠くて自転車で行くと二時間近くかかってしまう。俺はいろはを待たせぬよう七時前に家を出る。そして自転車をこぎまくって坂道を上ったり下ったりと紆余曲折を繰り返して森林公

園にたどり着く。

集合の一時前に着いたはずなのだが、俺が森林公園に入った頃にはもういろはが待ち構えていた。

「おう、早かったな……」

「……私が誘ったんだから、遅く来たら失礼でしょ」

いや、まあそうだけど……女子なんだから遅れてきてもいいんじゃないあ……。

「時間ないから、さっさと始めるわよ」

「……何を？」

俺はそう言って首を傾げる。呼び出されていきなり始めるとは何のことが全く予想がつかない。

「何をつて、もちろん、いつもの」

いつもの？　ってことはあのグダグダ演劇をここで始めるのか？

「いや、ここでつて、周りの目もあるし……」

「周りの目がないと思ってここに来たのよ」

「いや、周りの野鳥観察してる人を見れば分かるだろ」

「あつ……」

今更気付いたかのようにいろはは周りを見回す。そして、落胆した。

「ここならいらないと思ったのに、何で……？」

一応他人には見られたくないようだ。ということは、多少の羞恥心を持っているということである。

「ここじゃ出来ないだろ。どうする？」

俺がそう尋ねると、いろはは頬に手を当て、やがて口を開いた。

「……じゃあ、商店街に行きましょう」

「へっ？」

何でそうなる？　ってことはもしかしてもう一回俺ん家の方に戻るってのか？

「ほら、時間がもったいないから、早くするわよ」

「……本当に？」

俺がそう尋ねるといろはは当然と言わんばかりに大きく頷いた。
……行くんなら最初からそうしてくれよ。

俺はいろはを自転車の後輪に乗せて山道を上り下りした。いろははいいと言ったのだが、さすがに俺だけ乗せてチャリを爆走するわけには行かないだろう。男として恥だ。とはいえ、いくら女子一人分とは言えども人間が乗っているわけだから、当然上り坂は辛い。俺は息を切らしながらも、何回目だか分からない坂を上っていた。

「……私、降りようか？」

「……いや、ここで降りたら俺の男としてのプライドが……」

「そんなこと言っていると、あんたのこと『馬鹿』って呼ぶわよ」

「ぐっ……」

俺は彼女が放ったストレートな発言に言葉を詰まらせる。つまり、それは俺の負けを表すわけで……。

「……すみません、降りていただけますか？」

「……最初からそう言えばいいのに……」

いろははそう言って自転車から降りる。なんか彼女に呆れられていると思うと、少し悲しくなった。

さて、軽くなった分、いろはをおいて坂を駆け上るわけにもいかないの、俺も自転車を押していくことにする。

「あら、私をおいて行かないの？」

「いや、この坂なら自転車を押した方が楽だから……」

「そう……」

いろはがそう言ったきり、その場に沈黙が訪れた。今考えてみると、いろはと二人きりで演劇をやったない時っていうのはこれが初めてかもしれない。

自転車を押しながら話題を探すのだが、少しも見つからない。焦って脳内をかき回しているうちに、いろはが俺の方を見ずに口を開いた。

「……少しは相手の身にもなってみた？」

そうか、この前の話題があつたか。

「……いや、なかなか難しいな。そんな簡単に出来ることじゃない」
「でも、今この気まずい雰囲気は何とかしてくれようとしたんでしょ？」

そう言っているのは俺の方に視線を移す。

「え、いや、まあ……」

俺が回答に困っていると、いろはが俺の言葉を塗りつぶした。

「それが、相手の身になるってことよ」

「えっ？」

そうだったのか、これが相手の身になるってことか。

「それに気付かないようじゃまだまだ精進が足りないわね」

「へいへい、精進して見せますよ」

いろはの軽口に、俺も軽口で返す。ようやくこういうような関係になれたのかと今改めてそう思った。

「……ありがとうな」

「？ 何よ突然……」

まあ突然のことだからいろはも分からないだろう。だから俺は精一杯の悪態をついてやった。

「相手の身にならなきゃ理解出来ないぜ」

やっと着いた頃にはお日様はとくに一番高いところにあつた。

「なあ、腹減らねえか？」

「そう？ 私は別に……」

そりやお前はチャリの後ろに座ってるだけでこいでるわけじゃねえからな。俺は既に四時間こいでるんだぞ。

「お前がどう言おうと、俺はファミレス寄ってくぞ」

「……自分勝手」

休日に出た自分の都合で家から二時間もかかるところに呼び出したのはどこのどいつだ？

「まあいいわ。私も荷台に座り続けて、お尻が痛いし……」

次はサドルに乗つけてこいでもらおうか？

そう言おうと思ったのだが、当然心優しい俺が言えるはずもなく、口をつぐんだ。

「さあ、入りましょ。早くしなさい」

ドアを押しながらそう言ういろはを俺は追いかけた。

店内はちょうどお昼時なのにもかかわらず、あまり人がいない。そのため、俺たちはそれ程待つこともなく席に着いた。それにしても、休日の昼にこの入りつて……店は大丈夫なのか？

「お前は何か食べるか？」

ウェイターが来て、俺が一通り注文を終えた後に、いろはに尋ねる。

「……サラダ」

「サラダ？ それだけ」

「別にいいでしょ。私の事情なんだから……」

いや、それはそうだけど、昼間になってサラダだけって。よっぽど腹が減ってねえんだな。

その後に彼女がドリンクバーも注文すると、ウェイターがメニューを持って立ち去る。

飲み物はセルフサービスなので、俺もいろはも席を後にし、ドリンクバーへ向かった。

俺が一足先にコーラを持って席に戻ると、しばらくしてからいろはがコーヒーカップを持って帰ってきた。

「何それ？」

「エスプレッソコーヒー」

「熱くないの？」

「……………」

いろはは俺の質問に答えようとしない。もしかして、今頃失敗したって気付いたか？

「……………まあいいわ。試練だと思えば……………」

何故それを試練だと思う必要がある？

俺はそう思いながら九十度近く首を傾げるのだった。

席に戻っても、しばらくの間は料理など来るはずないので、その場のぎに何かの話題を提供しようと思ったのだが、生憎そんな頭脳は俺にはない。そして口をつぐんでいる間にやってきた沈黙という名の敵。俺はそいつに対抗しようと必死で頭をかき回すのだが、アイディアなんぞ出て来ない。

いつの間にか俺はいろはの顔をじっと見つめていたらしい。彼女に奇妙な顔をされながら沈黙を破る一言を言われた。

「……気味悪いわよ」

「へっ？」

「どうしたの、私の顔になんかついてる？」

「あ、いや、別に、ないけど……」

「じゃあ何で私のことじっと見てるの……？」

「え、そう？」

話のネタがなくて……とは言えなかった。なんか恥ずかしくないか。話のネタ切れって。

「……ま、大方沈黙が気まずくて話のネタを探そうとしたけどなかったってところでしょ」

「げっ、バれてやがる……」。

「なんでもいいから質問してみたら？ 私のこと、知りたいんですよ？」

いや、まあ確かにこの間そういうようなことは言っただけ……。とはいえ、他に話のネタも見つからない。俺は仕方なく静かに口を開いた。

「……聞きたかったんだけど、あの劇ってどうやって思いついたりするんだ？」

「劇」のところではいろはの額にしわがわずかによった気がしたが、きつと気のせいだろう。

「……そうね。色々なメディアからネタ元吸収したり、自分の夢に出てきたことをそのままとか……」

自分の夢って、まさかあんなの毎日見てるのか？

俺はいろはの発言に驚きつつ、一方で納得していたりもしていた。これがいゝろはのルーツなのだと。

「じゃあ、次だけど……」

「何？ まだ聞くの？」

「えっ、ダメ？」

「……まあ、いいけど……」

そう言いながらいろははそっぽを向いた。もしかして、恥ずかしいのか？

俺はそんなことを思ったりしたが、全く気にせずに質問の方に入る。

「じゃあ、お前の将来の夢って……」

「……また、それ……」

いろははもの凄く不機嫌そうに俺を眺める。やがて、頬を膨らませて思いつきりあさつての方向を向いた。

その時やつと俺はこの間この質問をして失敗したことを思い出した。しかし、今思い出してももう遅い。いろはの機嫌はしばらく直りそうにない。

またやってしまったと少し後悔してしたもの、時既に遅く、俺は注文したステーキセットを食べながらいろはの機嫌が直ることを今か今かと待った。それにしてもいろはの奴、何で自分の夢をそんなに拒むんだ？

さて、昼飯も食い終わったところで俺たちはレストランを出た。それにしてもいろはの奴、本当にサラダだけで済ませやがった。体力の方は大丈夫なのか？

「……次、どうするの？」

いろはの質問に俺は少し考えてから口を開く。

「……そうだな、お前はどこか行きたいところないのか？」

「……人のいないところ……」

いや、街中でそれは無理だろ。っていうか、いろははまだあの続きをしたいというのか？

いろはは俺の視線を感じて気持ちを悟ったのか、顎に手を当て、再び思考する。

「……じゃあ、ショッピング」

「ショッピング？」

「何？ 何か悪いことでも？」

いや、悪いことはないんだが……その有無を言わせぬ視線はやめてはくれないだろうか。非常に怖い。

「分かったな、ショッピングだろ。それにしても、何か買いたいものでもあるのか？」

「……特に決まってるない。どうせ暇つぶしになるから」

やっぱりその程度か。もしいろはがこの上ない笑顔でショッピングを始めたらと考えるとちよつと鳥肌立つぜ。

「何よ。人を何の興味もなさそうな人だっていう目で見て。私だってショッピングぐらいするわ」

いろははそっぽを向く。どうやらショッピングなんてしなさそうというイメージがよほどショックだったのだろう。彼女はあさつての方向を向いたまま、しばらくは俺の方を見向きもしなかった。

それにしても……と考えて、俺は首を傾げる。さて、いろはの助言がないまま、俺は彼女をどこに連れて行けばいいのだと？

とりあえず、俺はいろはが後ろについてくるのを確認しながら大型の衣料品店に入った。女性というものを完全に理解しているつもりはないが、きっと衣料品店ならそんなに文句もないはずだ。

案の定、いろはも女性としてそこまでずれているわけではないらしい。「あんたにしてはなかなかいい所を選んだわね」と言っ、彼女は品定めに集中する。

「なあ、俺も別の所物色していい？」

そう言った俺の声も、彼女の耳に届くことはなかった。

「決めた。これを買ってちょうだい」

一通り物色を終え、いろはの元に返ってきた時の一言目がこれだからまた困る。何故俺が彼女の欲する物を買わなければならないんだ。

「慰謝料。あんたの言葉で、色々と傷ついたわ……」

そんな理由なら、俺がいろはに付き合っただけで演劇している時のバイト代をくれよ……。

「ごちゃごちゃ言っていないで、さっさとコレ、買ってきなさい」

そう言っているのは俺に差し出したのは、これまたどうして男が買えないようなデザインの奴にするのかな。果たしてこれは俺をいじめるためのものか、それとも彼女の趣味なのか……。

「……いや、別に買うのは構わないんだが……一度その服着たお前を見せてくれないか？」

「うわっ、何、あんたってもしかして変態？」

「……それはどういうことだ？」

「どうもこうも、女性に着替えを頼んでいる時点であんたド変態よ」
うぐっ、そう言われてみればそう感じないこともない。何たる失態。

「……まあ、買ってもらおう立場なんだから、ノーとは言えないわね。いいわよ。少し待ってなさい」

そう言うなり、いろはは試着室に入ってしまった。

「どう？」

着替えを済ませたいろはが出てくる。それにしても何でドレス的なものを今買う必要がある？

「ああ、似合ってるけど……」

しかしそんなツツコミもすることはなく、俺は平然とそう答えてしまった。

「ねえ、私をどこへ連れて行ってくれる？」

「えっ？」

「姫なんて退屈なもの。ねえ、どこへ連れて行ってくれるの？」

「ええっ！？」

まさか、こんなところでモードに入るとは。それにしても、他人がいるところでは嫌だと言っているのにどういったことだ？

「さあ、どこへ？」

「分かった。分かったからとりあえず着替えてそれを買つかどうかしてくれ」

俺がそう言い聞かせると、いろはは不機嫌な表情になりながらも頷き、呟いた。

「つまらない」

俺はいろはが試着したドレスを買わされ（なんかやたらと高かったか）、店を出た。

「ねえ、私あのドレス着たいんだけど……」

「アホッ！ 着替えるところがないわ！」

どこで着替えるって言うんだこのヤロウは。それに着替えたところでその着替えはどうする！？

「とりあえずどっか行こう。どこがいい？」

俺が尋ねるといろはは即答した。

ただ一言「公園」と。それにしても、そこまで劇をやりたいものかね……。

さて、公園にたどり着いた途端にいろはのスイッチが入った。

「あと三十分もしないうちにUFOが私を迎えに来るわ」

いろはは夕日を指差す。それにしても何でUFOネタ？

しかしそんなことは言ってられない。こんな初めてのクリアを目指して、俺は演技を始める。

「何でだ……何でそんなことが起こる？」

「当たり前じゃないの。私は向こうの世界から来たんだもの……」
いろははそう呟いて俯く。しかしいろはを帰すわけにはいけない。
きつと帰したらゲームオーバーになる。

「ダメだ！ 行ったらきつとダメだ！」

「何で？ 元の世界に帰るのよ」

「世界？ どういうことだ？ 星ではないのか？」

「知らないの？ UFOは異次元への扉。異空間への入り口だわ」
なるほど。そういう設定か。それもなかなか面白いアイディアだ
な。

「でも、君は帰っちゃダメだ」

「何で？ 帰してよ！ 私を元の世界に帰して……」

いろはの目元にうつすらと涙が浮かぶ。どうしてたかが演技でこ
こまで出来るんだ？ ものすごいスキルだぞ。これ……。

俺も演技で負けるわけにはいけない。なんか負けたらまたゲーム
オーバーになる気が……。

「帰るな！ 帰ってはダメだ！ 帰るな！」

俺は何でこんなことをやってるんだろう……。

いろはに向かって叫びながら今更になってそんな事が頭に浮かぶ
でも、これをやらなければいけないという義務感を感じる。だけど、
いろはに強制されてはいないんだし、やらなくてもいいんじゃない
のか？

「何で？ 教えてよ！！」

いろはは叫んだ勢いで涙を流す。すごい演技力だ。まるで本当に
帰っていったしまうような、そんな気がする。

もしかして、いろはは本当にUFOに乗って異世界に帰っていつ
てしまうのでは？ …… 馬鹿馬鹿しい。そんな事あるわけないのに。
だけどいろはの演技を見ていると、どうも完全に嘘だとは思えな
い。いくらなんでも演技が上手すぎる。誰も見ていないし、わざわざ
演技をする必要もないと思う。

それに、そんなに演技が好きなら演劇部にでも入れればいい。だが、

それすらもいろははしようとはしない。

何でだ？　いろはは何を伝えようとしてる？　この演劇を続けて俺に何を知って欲しい？

色々な思考を脳内で巡らす。

今いろはは何を欲しているのか、それが何よりも知りたかった。

高城　いろはが電波系少女かと聞かれれば俺は迷わずノーと答える。仮に彼女が電波系であったとしてもそれは彼女の一部分でしかない。

本当のいろはは、俺が思ったよりも身近にいた。そのことを今、気付いた。

きつというはは普通の女の子よりも不器用で、だからこんな形の劇でないと気持ちを伝えられなくて。

今まではいろはのことを逃してしまった。

だけど、今度は彼女を逃がさない。もう見つけたから。この劇を終わらせる答えを、見つけたから。

「……困るんだ」

俺はいろはに聞こえるか聞こえないかギリギリの音量で呟いた。

「えっ？」

案の定、いろはは演技とはかけ離れた声を出した。

「何て言ったの？　聞こえないわ……」

しかしすぐに演技に戻るのがあるのはの凄ところだ。本当に演劇部に引けをとらない演技力である。

「君に帰られたら困るんだ」

俺は先程とは違い、はつきりと断言した。

「何で困るの？」

いろはは首を傾げる。この言葉を言うなら次だ。これ以上引つ張ったらゲームオーバーになる気がするし、タイミングもこの上ない。あとは、少しばかりの勇気だけだ。

俺はいろはにバレない様に小さく深呼吸した。そして、ゆっくりと口を開く。

「……君のことが、好きだから……」

しばらくの間、いろはは間抜けそうにぼかんと口を開けていた。それから、すぐに我に返って演技を続ける。

「……どうしたことよ……今更になって……」

「ごめん、君がどうしても行くって言っから。本当は言わないつもりだった。叶わないものだと思じていたから」

いろはは一步一步僕に近づいてくる。そして左手で僕の胸に触れた。

「何で……何でもっと早く言ってくれなかったの？」

「だから言っただろ。叶わないものだと思っ……て……」

いろはは突如僕の後ろに手を回し、僕の胸に顔を埋めた。

「……何でよ、何でもっと早く……」

それは、演技をしているいろはではなかった。

これが本当のいろは。何の演技もしていない純粋な高城 いろはそのものだっただ。

俺の胸元で泣いている彼女を見て、やはりいろはは電波系少女ではないと確信する。

それどころかいろははとても奥手で、むしろ普通の女の子よりも女の子らしい女の子だ。

だから、俺はゆっくりと彼女を抱きしめたんだ。

「離さない。例えUFOが来ようが、隕石が落ちてこようが……」
いろはの温もりをその手に感じた。その場にいるのは演技をしているいろはではない。俺の好きな女の子の高城 いろはとしてそこにいる。

演劇はそこで終わった。

何で普通ではなくてこういう形ではないといけないのかと聞いた

ところ、いろはは頬を赤く染めて「……だって、恥ずかしいんだもの」と俺の想像した答えとほぼ同じように答えた。

また、演劇をやるならば何故あんな電波的な劇にするんだとも問うたところ、いろはは「……あんたがこういうUFOとかそういう『異常なシチュエーション』が好きだって聞いたから……」と俺が想像した答えとは到底かけ離れた答えを口にしたのでいささか驚いた。それにしても、クラスの連中は俺のことをそういう風に捉えていたのか……。

色々な質問をいろはにして、俺はようやく彼女の言っていた「相手の身になれ」と言うのがどういうことだかということを知った気がした。

きつと、あれはゲームをクリア出来ない俺へのヒント、それだけではなく、自分の気持ちに気付いてほしいというSOSだったのだ。まあ、結果として俺はこのゲームを開始して始めてクリアをし、その商品として、かけがえのない大切なものを手に入れた。

あれ以降、いろはが奇行に走ることはなくなった。そしてちゃんと恋人っぽいこともしている。

だけど、未だにそういう気持ちを伝えるのは恥ずかしいようで、今でも時々誰もいない放課後の屋上で、演劇を続けている。最近はその劇に隠された本心を探るので精一杯の毎日を送っている。

第三話 ド変態なカレ

米田 よねだ けんじ 研二はいわゆるド変態である。

普段の生活や男子と会話している時は落ち着いた、ちょっとカッコイイかなって思えるくらいの男子生徒なのに、いざ女子生徒が近づこうものなら「襲うぞ」と口走って女子生徒が逃げ出すまで近づいてくるのだ。

そのせいで先生から要チェックされ、嚴重注意を何度も受けていた。毎度手を出す寸前で何らかのことがあり（例えば先生に捕まるとか）、停学処分を受けたことはなかったが、それでもいつ彼が問題を起こすのかと皆研二の挙動に注目していた。

さて、そんな女子襲い魔の研二ではあるが、なぜだろう、私だけは唯一の例外だった。

私がどれだけ彼に近づこうと、彼は襲いもしないどころか、うんともすんとも言わないのである。

これは私が女だと認められていない証拠なのか。いくら髪型がシヨートで少し男っぽい口調だからって、たったそれだけの理由で私は研二の興味の対象外なのか。

最初そのことを知った時、私は少しかりショックを受けたが、今では私を武器にして研二から身を守る女子生徒もいたりして、一種の警備として開き直っていた。

「コラッ！ 研二！ また女の子襲ったりしない！」

そう言っただけで逃げ惑う研二を追いかける私。いつの間にかこの光景が一つの日常と化していた。

「何で私だけ研二に追いかけれないんだろう」

「いいじゃん、私なんてもう何回も襲われかけたわよ」

うらやましげな視線で理子りこは私を見つめる。そして彼女は再度口にした。

「追いかけられたいの、彼に？」

「まさか」

「そうよね……」と言いながら二人して溜息を吐く。あいつを追いかけることはあったとしても、逆はありえない。

「……黙っていれば顔はそこそこのいいのにね……」

「そう？」

理子の言葉を聞くまで、私はそんなに意識していなかった。彼の顔を脳裏に浮かべてみるが、女子を追いかけている変態的な形相しか思い出せない。

「……全然だけど」

「……分かってないわね、ユキは……」

理子はそう言っただけ溜息を吐く。私の何が分かっていないのだろうか。男を見る目がないとか？

「男っぽいからじゃない？」

「何が？」

「ユキが追いかけれない理由」

「……ああ」

ショートヘアーの髪を撫でる。確かにこれが原因であると考えてもおかしくはない。

「そっちなじゃないでしょ。男っぽい理由は」

理子は薄ら笑みを浮かべ、視線を下の方に移して胸の辺りで止める……胸？

「どーせ私はペタンコだよ！ まな板だよ！」

怒って追いかけてやうとする前に理子は舌を出して走り去る。

「ごめん、私用事があるー！」

そう言っただけでいく理子を見届けてから、私は小さく嘆息する。
……そんなに男っぽいだろうか、私……

「こら待ちなさい、研二！」

数日後、私はいつもの如く女子を襲おうとしていた研二に攻撃を

仕掛ける。しかし、それもまたいつもの如く私が出てきた途端に彼は女子を襲うのを止め、私から逃げるかのようにそっと私から逃げていく。

「まったくもう……」

腰に手を当ててそう呟く。少しおばさんぽい気がしたが、そんなことはお構いなしだった。

「いつもありがとうね、ユキ」

クラスメイトの女子に感謝され、私は少しばかり自慢げに胸を張った。

「いつでも言ってきたね。私は彼の唯一の弱点だから」
弱点。

自分でそう言っておきながら、少しばかり心が痛かった。
何で、私が弱点なんだろう。

研二が私のことが嫌いな訳って何だろう。

やっぱり、私が男っぽいからかな……。

「なんか、ユキって『お姉さん』って感じたよね」

思考を働かせていたところへクラスメイトが話しかけてくる。

お姉さん。

その一言に、私の考えが働く。

もしかして、研二って実の姉がいて、それが苦手なんじゃ。

だからお姉さんキャラが苦手ってことも十分考えられる。

「もしかして……」

思わず言葉に出ていた。それを聞いてクラスメイトが首を傾げる。

「え、どうしたの？ ユキ？」

「うつん。なんでもない。ようし！」

意気揚々と握りこぶしを固める私に、クラスメイトはさらに首を傾げた。

「……どうしちゃったの……ユキ」

しかし、彼女の言葉は私に入ってきているようでまったく入ってきていなかった。

今はそんなことどうでもいい。

私に関係あるのは、研二の親族だけだ。

「ねえ、研二にお姉ちゃんっている？」

「研二に？」

私は研二の友人である敬人^{あきひと}に話しかける。敬人は少しばかり首を傾げて思考するが、やがて心当たりがないのか、首を左右に振った。

「いや、聞いたことないな」

「本当に？ 随分上でもいいんだけど……」

「いや、あいつは一人っ子のはずだ。けどどうした、急にそんなこと聞くなんて……」

「いや、別に……」

「いないの？」

まさかとは思うが、本当にいないようだ。では、他に何が……

「じゃあ、お母さんってどういう人？」

「いい人だよあの人は。優しいお母さんって感じたな」

「そう……」

じゃあ、母親の影響ってわけでもなさそうね、研二があんなんなのは。

「……じゃあ、親戚とかは？ いないの？」

「……親戚ならお前の後ろにいるが……」

私は敬人に言われた通りに背後に視線を送る。そこには、腰に両手を当てて立っている敬人の恋人、このみがいた。

「……私の敬人君に何か？」

満面の笑みを浮かべているがそれが営業スマイルであることは一目瞭然だ。嫉妬深い女の子だと心中で思う。

「っていうか、あんた研二の親戚なの？」

「そうよ。それがなにか？」

このみか。それだったら私の想像とは違う。このみは決してお姉さんっぽいタイプじゃない。どちらかというと、年下の、妹のよう

なタイプだ。

私が思考している間に、このみの頬はどんどん膨れていった。同姓の私が言うのもなんだが、かわいらしい仕草だ。

「あ、決してあなたの恋人を奪ったりしないから。じゃあね、敬人
また情報提供よろしく！」

一言礼を述べて立ち去る。

「もう来ないでよ……！」というこのみの声が聞こえた気がした。

結局、研二に親戚関係でお姉さんの人はいなかった。

では、何で私が嫌われなければならない。私の何が研二を遠ざけているのだろうか？

分らない。

研二のことが、何も……

……何を考えているのだろう。

気が付けば、私は研二のことばかり考えていた。

最初、あれだけ研二のことを嫌っていたのに、今ではその研二のことばかり考えていた。

私は一つ嘆息し、ベッドに寝転がる。

天井を見上げて、何故私がこんなことを考えているのかを考えてみる。

だけど、何が原因なのか分からない。

一つだけ、頭に思い浮かぶ。

研二のことが……好き。

違う。

違う違う違う！

首を思いっきり左右に振って今の考えを頭から吹き飛ばす。

「はあ」

もう一度嘆息する。

私、何を考えているんだろう。

何で今、涙が出てきたんだろう。

考えてみたけど、結局答えは出てこなかった。

ある日、いつものように研二は女子に襲いかかろうとしていた。

「こら、研二！」

研二から女子の身を庇うために研二の前に両手を腰に当てて立つ。すると同時に彼は興味を失ったかのように私達に背を向けた。

「ちよつと、何でいつもそんなことするわけ!？」

その場から立ち去ろうとする研二に尋ねる。研二は振り返らないまま

「……関係ないだろ」とだけ答えた。

その返答にはさすがの私も我慢ならない。罪もない女の子を襲っておいて、何が関係ないのだろうか。

「ちよつと待ちなさい! 関係なくないでしょ!」

私が彼を引き止めようとしたが、彼の服に触れた途端、研二は人が変わったかのようにすぐさま振り返った。

「俺に触れるな!」

刹那的に涙が頬を伝った。

まさか、こんなことを言われるとは思わなかった。

研二は悪びれた様子もなくその場を去る。そんな彼の後姿を見ながら私は思った。

……何で、私だけこんなに嫌われてるの……

しばらく経つてようやく涙が止まった。でも、未だに心は晴れない。

「大丈夫?」

私が泣き止んだのを察して理子が声をかけてきた。やっぱり持つべきものは親友だと思う。

もう放課後で誰もいないのに、それでも理子は私が泣き止むまで待つてくれたんだ。

「……あれは、言い方がひどいと思うよ」

理子が同情するかのようにそう言う。私もそう思う。そんなに言われるほど何かをした覚えもない。

「……………なんでだと思う？」

涙声にならないよう、注意を払って言葉を発した。理子は顎に手を当てて思考する。だけどそんなにすぐ答えが出るとは思わない。私があれば考えて出なかったんだ。今考え始めたばかりの理子に答えが出ないとは思えない。

「……………もしかすると、あなたに関係ないのかもね」

「えっ？」

意味が理解出来ない。私に関係ないとは一体どういうことだろうか。女子の中でもこんな扱いを受けているのは私だけだ。だから私に関係ないはずがない。

「そんなことない」

「言い方が悪かったわね。つまり、彼の行動の原因は直接あなたには関係ないってことよ」

「どういうこと？」

私はそう尋ねるが、彼女は再び顎に手を当てて本格的にしこりを再開してしまい、私の声は届かない。理子がその状態から脱却するまで、私は静かに彼女の隣で言葉を待っていた。

「……………もしかして」

ようやくして、理子はそう言った。

次の日、昼休みに理子は研二と対峙していた。

「……………何だよ」

研二は男子と談笑していた時の笑顔の表情から一転、不機嫌そうな表情になる。「襲うぞ」

「あら、あなたにそれが出来るかしら？」

研二の表情に全く物怖じすることもなく理子は強気に彼と対峙する。

「ちょっと、理子！ 何を考えているの！？」

私は彼女の耳元でそう呟くが、それでも理子が引くことはない。

「本当に襲われるわよ」

「襲われないわ。ね？」

理子は目で研二を威圧する。すると彼は一步步理子に歩み寄り、やがて彼女の目と鼻の先で立ち止まった。

「ほら、襲ってみなさい」

理子は抵抗をしないとばかりに両手を広げる。私はそれを止めようとするが、理子に「下がってなさい」と言われ、制止をかけられる。

研二は今にも襲いかかろうとするが、一向に襲いかからない。彼はそのままギリギリと齒軋りを始めた。

「さあ、どうぞ」

「……………クソ！」

「出来ないでしょう。私には分かるわ。あなたは——」

理子は犯人をずばり言い当てる名探偵みたいに研二を指差す。

「——あなたは、女性恐怖症なのよ！」

理子の言葉で研二の顔は一気に青ざめていった。二人の間に集まりつつあった野次馬どもも騒然とし始める。

「……………何を」

「はつきりとおっしゃい。そうなんですよ」

「そんなはずがないだろ！」

「じゃあ…………」

理子は瞬間的に手を伸ばす。それに応じて研二は彼女の手を払った。

「あら、どうしたの？」

理子はわざとらしい笑みを浮かべる。そして再び手を伸ばそうとすると、研二は怒鳴った。

「止める——」

あまりの迫力に理子は一瞬手を止める。しかし、再び研二に向かつて手を伸ばした。

「恐怖症じゃないのでしょうか？　なら触れてもいいじゃない」

「汚らわしい手で触れるな！」

「汚らわしい手？」と理子は首を傾げる。私にも意味がまるで分からなかった。一瞬手を止めたうちに研二は教室を抜け出して走り出していた。

しばらくの間、私達は研二と話すことが出来なかった。彼は本気で私達を嫌悪しているらしく、視線が合っただけで目を逸らしてしまっ

私は何度も彼に話しかけようとしたのだが、近づくだけで彼はまるで磁石の同極であるかのように離れていった。

まるで立場が逆転したかのようにだった。

何故立場が逆転してしまったのだろうと考えるが、答えは出てこない。

理由が知れたかった。研二が私達を嫌悪した理由が。

「どうしたんだろう……」

思わず口に出す。

研二のあの嫌がりようは異常だった。ただの女性恐怖症ではない。過去に何かがあったに違いない。

「……知りたいな。もっと彼のこと」

思わずそう口にした言葉に自分でもびっくりして赤面する。何で研二のことなんか知れたがるんだ、私。

首を左右に振って今の考えを払拭するが、それでもすぐに研二の事が脳裏に浮かんだ。

それでもやっぱり知りたい。研二のこと。

「……聞いてみよう」

もう一度。研二の親戚の、このみに。彼女は嫌がると思うけど。

案の定、このみは全快の嫌がりようで私を迎えた。まるで猛獣であるかのように牙を剥きだして獣らしい声を上げている。敬人がいないととても話せる状況じゃなかった。

「このみ……さん？」

「何よ！」

敬人に宥められてようやく話せる状況になったのだが、私が話しかけると再び不機嫌になった。大丈夫だって。敬人には興味ないから。

「あのさ、研二のことについて聞きたいんだけど……」

「なに、敬人君目当てじゃないの？」

目的が敬人じゃないと分かるとこのみの牙は引っ込んだ。

「研二がさ、女性恐怖症みたいなんだけど……」

「じよせーきよーふしょー？」

このみは間拔けた声で私の言葉を繰り返す。何だ、この娘、バカなのか？

「私にはそんなことないよ？」

しばらく思考してから彼女はそう答える。彼女を見ていたら納得がいった。この小動物に対して恐怖は感じないだろう。

「あなたじゃなくて、覚えがない？ 例えばお母さんとか……」

「ああ、お母さん！」

このみは何かをひらめいた子供みたいに手をポンと打った。

「そうだよ、お母さんとは仲が悪かった」

「それは、何で？」

私の質問にこのみは少しばかり表情を渋らせたが、少しして口を開いた。

「研二のお母さんはね、本当のお母さんじゃないの」

「本当のお母さんじゃない？」

「そう。本当のお母さんはもう病気で死んじゃってるんだ」

このみの言葉で、全てが分かった。

彼が女性恐怖症な理由。それと、隠れていたこのみと私の共通点

を。

「……何だよ」

これから下校する研二を校門のところで待ち伏せる。私が声をかけたところ、案の定、彼は不機嫌な表情で言葉を返した。

「あんた、女性恐怖症を克服したいと思わない？」

彼は無表情で私の質問に答えずにその場を立ち去ろうとする。

「お母さんが怖いんでしょ？」

私の一言で彼は足を止めた。「どうしてそれを知ってる？」

振り返った研二の表情は憤怒のそれだった。しかし私も怖気づくことはない。この間ので研二が女子に手を出せないことくらいは知っている。

いくら彼が怒っていても、足を止めている以上は話を聞いてくれるようだ。私は彼の機嫌に関わらず口を開く。

「でもあんた、いとこのこのみちゃんは平気なんだってね」

「それまで知ってるのか？」

研二は半ば呆れたように溜息をつく。

「誰に聞いた？」

「あんたの友達の敬人君」

あいつめと悪態を吐くのが耳に入る。少しばかり敬人に申し訳ないと思いつつも言葉が続けた。

「私分かったの。あんたがこのみちゃんが大丈夫で、他の女子、例えば理子なんかが駄目な理由」

理由という言葉に研二はわずかに反応する。もしかしたら自分でも理解しているのかも知れない。だけどそれを自分で認めることが出来ないでいるのかもしれない。

だから、納得させてあげよう。

研二にとっての、女性とこのみの違いを。

「あんた、このみちゃんを女性として見たことないでしょ」

研二は何も答えようとしない。しかし彼の表情からして恐らく図

星だろう。

「あんたはこのみちやんを親戚の例えば、妹のような存在として異性を意識したことはなかった。だけど、あんたの実の母親が亡くなってしまうってから新たに来た義母には異性を感じてしまった」

「それも敬人に聞いたのか？」

「いえ、義母はこのみちやんに聞いた。あとは私の憶測」

「……あまり憶測でものを言うもんじゃない」

徐々に研二の表情が曇っていく。早いうちに結論を示さないと話を聞いてくれそうにない。

「ある日、あんたは義母に迫られた……」

「憶測でものを言うな！」

「最後まで聞いて！ それから反論してちょうだい！」

少々強引に話を曲げたかもしれない。だけどそうでもない限りこの続きを彼が利くとは思えなかった。

「その一件であなたは女性恐怖症に陥った。女性を毛嫌いするようになったの。女は全部あいつみたいに品がないって」

研二は睨みつけるようにして私に制止をかけようとするが、私は言葉を止めない。

「理子の手をはけたのだって、きっとその時の姿が義母に重なったからなのね」

「……お前は何故、俺にそこまでまとわりつく？」

やつとのことで研二が口にした言葉は、私への質問だった。

「あんたは当初、私に異性を感じなかったんじゃないくて？」

「……………」

「黙っていても分かるわ。そうでしょ？」

研二は返事にとばかりに舌打ちをした。

「理由は簡単。私が男っぽいから。ただそれだけ」

本当にそれだけなんだ。研二の女性恐怖症も、ただの気の持ちよう。

だからこそ治せる。彼のココロの病気は。

「そこで提案があるんだ」

私はそう言って、眉をしかめている研二にココロの処方箋を差し出した。

「少しの間でいい。もし嫌じゃなかったら、私と付き合って」

「は？」

私の言った言葉が理解できないのか、研二は怪訝な表情をする。

「私があなたの女性恐怖症を治してあげる」

「どうやって？」

研二は少しばかり表情を歪めてそう尋ねる。無理もない。彼の心底に刻まれたココロの傷は相当深いものだから。

「自分で言うのもなんだけど、私って女の子らしくないでしょ？」

だからこそ、私なら彼の病気を治すことが出来る。限りなく女性から離れている私なら。

「最初は私と接することが出来たんだから、きっと今でも出来るはず」

研二は何も言わないで私の話を聞いている。もしかしたら何の話題もなく私と接することが出来ていたときのことを思い出しているのかもしれない。

「最初は女の子と思わなくてもいい。私もそんなに得意じゃないから」

決して女の子らしいことは出来ないかもしれない。

研二のために何か出来るっていう絶対の自信があるだけでもない。女性恐怖症を克服したら捨てられても構わない。

だけど、研二のために何かをすることが出来たら。

「私が治す！ だから……」

私は、研二が好き――

「私と、付き合って！」

私の思いの丈は全て伝えた。
あとは研二の答えを聞くだけ。
怖くて目が開けられない。

大丈夫だという確証はない。むしろ不安で精神が壊れてしまいそう。

どれだけ時間が経ったか分からない。もしかしたら、時間が全く経っていないのかもしれない。

早く言ってほしい。

良くても駄目でも、早く……。

「——本当に」

研二が口を開いた刹那、恐怖で耳を塞ぎたくなるが、それをすんでのところで抑える。

「本当に、治してくれるんだな？」

恐る恐る見つめた研二の目は、この上なく真剣だった。

「出来るだけのことは手伝う。あとはあんたの度胸次第。だけど――」

――

私は一拍間を空けてから再び口を開く。

「——その度胸をつけることは出来る！」

再び沈黙が二人を包む。しかし、今度は先程より長くなかったように感じる。

真剣な表情から一転、研二は少しずつ震え出し、そして我慢できなかったのか、急に笑い出した。

「……降参。ここまで言われたら治してもらおうじゃねえか」

ひとしきり笑い終えると研二はそう言った。

最初、彼の言った意味が理解出来なかった。だけど脳内で整理し終えた私は、思わずガッツポーズをしてしまう。

「うわ、可愛くねえ！」

「それを言っな！」

これってOKだって言えるのだろうか。少しも進展した気がしな

いのだが、まあすぐに進展するはずもないので、まずはここから始めよう。

「じゃあ、握手」

「は？」

「まずは第一歩」

そう言って右手を差し出す。研二は少し躊躇った表情をした後、少しずつ手を伸ばす。しかし、もう少しで届こうかという寸前で、彼は手を引っ込めた。

「やっぱり無理！」

そう言って彼は背を向けて走り出す。あまりにも急なことだったので呆気にとられた。

まだ手を繋ぐのは早いのかな。でも、少し嬉しかったりする。だって、手を繋がないってことは、私のことを少しだけど、女性として感じてくれているから。

ゆっくり、一つずつ始めよう。そして女性恐怖症を治すのに合わせて、私も少しずつ女の子らしくなっていこう。

そしたらもう一回、女の子として私は研二に告白するんだ。

心中でそう決心すると、私は研二を追いかけるために走り始めた。

第四話 見えてしまうカノジョ

俺の前の席の少女——酒井 智美はなんというか、変な人物だ。二人して窓側の席なのであるが、授業中、彼女は終始グラウンドの方を見ていたり、教室の隅を見ていたりする。かといって、授業内容が決して耳に入っていないわけではなく、その証拠に教師からの出題を智美が間違えたためしなかった。

俺が智美を変だと言うのはそれだけではない。教室の隅を眺めた状態で、彼女はなにやら呟いているのである。その光景はなんというか、不思議少女に他ならない。

そんな行動を除けば、智美はただのおとなしめな少女でしかないのに、その行動だけで、彼女はクラスでもいろんな意味で一目置かれる存在になっている。

そんなある日、いつものように彼女が教室の隅を見つめながらこつそりと呟いているのを、たまたま俺は聞いてしまった。

「……そう、首を捜しているの……」

首とは何だろうか。そのままの意味でとればいいのだろうが、そのままの意味でとるとんでもなくカオスな状態になってしまう。しばらく考えて、もしかしたらと思いつく。

彼女には、常人に見えてはいけない『アレ』が見えているのではないか？

聞いたところによると、彼女は神社の家系らしい。いわゆる『巫女さん』だそうだ。加えて陰陽道のようなことも行っているそうで、それで見えてしまうとか。まあ、聞いたといっても全部彼女の独り言なのだが。

そうという系列の話には興味があるのでもう少し話を聞いてみたい

のだが、その勇気が沸かない。だって、教室の隅に向かって話しかける少女に簡単に話しかけるか？ 俺も完全に変な人だと思われるだろう。体裁を考えたら話しかけるのは正解ではない。

だけでも、日増しに好奇心は増していき、中毒的なまでに俺はその知を欲した。

それで気付いた。

その知を欲している時点で、俺は既に変な人なんだって。体裁なんか関係ないんだって。

知りたいなら、それでいいじゃん。

っていうわけで、俺は早速早朝に学校に赴き、変わらず一人壁に話しかける少女の元へと歩み寄るのだった。

「……なあ」

俺の言葉を聞いて、虚空に話しかけていた智美はゆっくりと俺の方を向く。

「……あなたは……？」

「えっと、同じクラスの畑田だけど……」

「……知ってる」

俺のことを知ってくれていたのはありがたい。彼女は全く他人に興味がなさそうだったからな。それにしても、随分間の長い会話だ。

「えっと、お話中悪いんだけど……」

「あなたは、見えているの？」

智美は淡々と俺に向かって尋ねる。

「いや、見えないんだけど……いつも壁際や窓の外に向けて話しかけてるみたいだったから」

「そう……」

ものすごいシニカルな会話だと思う。他人がいたら完全に電波的な会話だ。朝早くに来て正解だった。

「……だからね」

長い沈黙から一転彼女がそう言って俺の方に手を伸ばす。わけも分からずそのまま硬直していると、彼女の手がそのまま俺の右肩の

少し上で、何かをつまんだ。

「こんな質の悪いのに、憑かれる」

一体彼女の目にはその左手の先に何が見えているのだろうか。少し恐怖感を感じつつも、その左手を見つめた。

「低俗な動物霊。気にすることはないから」

智美はそう言うてから左手に何か意味不明な言語を発して、その手をそつと開いた。

「……それで、用って、何？」

いちいち言うことをぶつ切りにするやつだとか思いつつ、俺は本件の方を……本件を……

本件って、何だ？

しばらく考えてみるが、やはり本件なんてものは存在しなかった。そもそも、興味本位で彼女に話しかけてみたただけだし、実際にこんなに会話が出来ると思わなかったから、内容だつて考えてなかった。

だからといって、今この場で会話の内容を考えてもその場を繋ぐための言葉すら見つからない。

目の前の智美は怪訝な表情で首を傾げたまま、俺が口を開くのをひたすら待った。

「……………えつと、特に話すことって、ある？」

「私は、ない」

はつきりと断言された。こうなった以上、俺から話題を作らなくてはならない。瞬時に考えて、地雷かもしれない質問を智美に投げかけた。

「えつと、霊とはどういう会話してるの？」

案の定、智美は首を傾げたままじつと俺を見つめる。間違いない。地雷を踏んだに違いない。地雷だと分かっていた踏んだからダメージは少ないと高をくくっていたが、予想に反して大ダメージだった。しばらくの沈黙が続く。早く智美の視線から逃れたかった。

「……………話」

「えっ？」

「……世間話」

霊と世間話って通じるんだろうか。時事ネタとか、霊は理解出来るのだろうか。

返答に困り、そこで覚悟していたのと違う地雷の種類だということに気付く。これでどうやって話を繋げばいい？

しばらく考えて、俺は再び苦し紛れに口を開く。

「……俺も話してみたいなあ………なんて」

それが更なる地雷だということに、俺は口にしてから気付いたのだった。

「……見えてなくても、話は出来る」

「えっ？」

「私が通訳をしてあげる」

まさか、冗談で言っただつもりがこうなるとは思わなかった。しかし、今更それを取り消すわけにもいかない。何を話そうか考えているうちに、智美が尋ねてきた。

「何を話したい？」

心なしに智美が饒舌な気がする。そんなことをふと思いながら、上の空な状態でとりあえず出任せで言ってみた。

「えっと、あなたは、誰ですか？」

そのことを智美が虚空に向かって謎の言語で話し始める。さしずめ、霊語といったところか。

そうこう思っている間に霊は何かを返答したらしく、智美はゆっくりと私に向き直った。

「『死ね』」

……これは、会話って言えるのだろうか。いや、断言しよう。これは会話じゃない、一方的な怨念だろう。

「智美、その霊は大丈夫なのか？」

「大丈夫って、何が？」

「いや、だからその……呪い殺されたりとか、しないのか？」

「大丈夫。私の友達」

友達……友達？ いやいやいや、そんな初対面で死ねとか言う奴と友達って、お前はそんなに危険な交際をしているのか？

「他に、何か言うことは……」

「いや、さっきの俺の質問の答え、返ってきてないし……」

「……そう」

そう言っただけで智美は再度虚空に向かって話しかける。しかし、何度とも身が尋ねてみても答えは『死ね』の一言倒だったそうだ。

俺が何度も智美の口から間接的に「死ね」と罵倒され続けるうちに、いつの間にか朝の予鈴が鳴っていた。よく周りを見てみると登校してきたクラスメイト達が俺に「死ね」と連呼している智美を怪訝そうな表情で見つめていた。

「おい、智美、皆変な目でお前のこと見てるから……」

「……でも、まだ霊との会話を終えていない」

「それはもういいから……」

クラスで変わり者にされてまで霊と話したくはない。俺がそう言うのと「そう」と言いながら俺に背を向けた。

「……じゃあ、後で」

ああ、また後で……後で？

智美の言ったことに俺は返事を返せなかった。また後でということとは続きがあるのか？

その考えを何より想像するのに容易だったのは、背を向けざまの彼女が微妙に微笑んでいたような気がしたからだ。

授業中に大抵の人は気付かないのではないかというくらい微妙なコンタクトを智美から受け取ったが、そのコンタクトも意味がまるで分からず、結局授業後に聞きなおす羽目になった。

「この教室で待つてるから」

「……あのさ、場所変えてくれないかな……」

非常に申し訳ないとは思うが、それでもこの姿をクラスメイトになるべく晒したくないので智美に提案する。智美は少しばかり間を空けてから口を開いた。

「……先程の霊とは会話できないけど、いい？」

「あ、ああ」

っていうより、さっきの霊だと『死ね』としか返答されないし、そっちの方が都合がよかった。

「……じゃあ、私の親友の霊と話す？」

「それはどこにいるんだ？」

「屋上」

智美が屋上で霊と会話している光景はこの上なくシニールな気もするが、彼女がそう言う以上は日常と化しているのだろう。それに、智美の親友というならば少なくとも『死ね』のオンパレードはないと思う。

色々な思考をした結果、俺は首を縦に振った。

「じゃあ、行こ」

僕に背を向けて歩き出す智美の後を歩きながらふと思う。何でこんな真剣に霊と会話しようとしているんだろうか？

しかし、その疑問は屋上に行くまでの短い時間では解決出来ず、気が付けば智美は屋上へと続く扉を開けていた。

屋上の中央まで行くと、智美は足を止めた。

「どうした？」

「……ここで、会話する」

「……ここで？」

ということは、智美の視線の先に男性だか女性だかの霊がいるのだろう。

「じゃあ、始める」

「ちょっと待て、その霊は男性か、女性か？」

智美はふと虚空を見上げてから、それに確認を取るように頷く。

「メス」

「そうか、メスカ……メス？」

メス？ 女性ではなくて、メス？

少しばかり頭の回転が鈍くなり、すぐさまそれを補おうと新しく入ってきた情報を噛み砕く。

「……智美、まことに下らない質問かもしれないが、その霊って人間か？」

智美は首を左右に振って答える。

「犬」

犬とな。つまり、生きている犬とも会話出来ないのに、死んでいく犬と会話をしなければならないのか。

俺の心配をよそに智美は虚空に手を振っている。いや、あれは犬の頭を撫でているのか。

「何か、聞きたいことある？」

「じゃあ、まず名前から……」

当たり障りのない質問を智美に伝える。というか、これ以外にすべき質問が見つからない。彼女はコクリと頷くと、犬がいると思しき方向に視線を移して謎の言語を再び使用する。その後しばらく黙って犬の返答を聞いてから、俺に視線を移した。

「……取り憑いてもいいかって……」

「……ごめん、穏便に断ってくれる？」

智美が一つ頷いて犬の方に視線を移したのを確認して、俺は一つ溜息を吐く。

結局、どの霊が相手でも前途多難なようだ。

ようやくそのメス犬の名前を聞いたところで、俺は一つ息を吐く。しかし、まだ安心は出来ない。智美の話によると、その犬——エリザベスは虎視眈々と俺に取り憑こうと狙っているらしい。

「何を話したい？」

改めて智美に尋ねられ、俺はしばし考える。

そうだ、話すことなんて特にないのだ。俺が話したいのは霊ではなく、智美の方。彼女がどのように霊と付き合っているのかを知りたいのだ。

だけど彼女がこうやって取り計らってくれているのに、特に質問がないというのはいささか失礼だ。

「……じゃあ、その犬の霊は何でここに未練があるんだ？」

俺の質問に、智美はしばらく何も答えない。やがて彼女はゆっくりと口を開く。

「……………それは、タブー」

タブーなんてあるのか、この世界に。死んでるんだから何でも聞いていいんじゃない……。

とりあえずタブーと言われた以上、俺は彼女に頭を下げ謝る。

それからまた質問を考え、当たり障りのない質問をいくつかする……が、返ってくる返事はどうしても俺に取り憑きたいという意志が丸見えであるものだった。

「楽しめた？」

「……………いや、何とか」

表面では笑顔を取り繕うものの、全く楽しめなかった。霊というものはそんなに人に取り憑きたいものなのか？ それ以前に何故エリザベスは智美に取り憑かない？

ともかく、俺の応えを聞いて智美は無表情ながら満足そうだった。

「また、会話する？」

「いや、もういい……………かな……………」

「……………」

「……………ごめん、いや、そんな顔するなよ。会話しに来るから」

本当に？ そんな表情をしながら彼女は首を傾げる。俺は仕方なく頷くと、途端に彼女は無表情の笑顔を見せた。

「……………何なんだろうな」

階下が続くドアの方へ歩き出した智美を見つめながら、彼女に聞こえないように俺は呟く。

「酒井 智美、か」

酒井 智美。再び心中で名前を呼んでみる。

幽霊が見える少女。幽霊と会話する少女。無表情だけど、わずかな表情の変化から感情が読み取れる少女。

今までに見たことのない類の少女に、しかし俺は次第に惹かれていったのかもしれない。

次の日、俺は前日とは変わってさして早く学校には行かなかった。いつも通りの時間帯に登校すると、教室前の廊下辺りでその異変に気付く。教室が、何やら騒然としていた。

何が起きているんだか分からないまま、俺は教室の扉を開ける。すると目の前に飛び込んできたのは人の囲い。そしてその中心に、智美がいた。

「何よあんだ！ 気持ち悪い！」

女子の叫び声が聞こえる。中心部にもう一人の、ボス格の女子がいて、彼女が発した声だった。

「あんだ今何やったっていうのよ！ ねえ！」

どうやら智美が何かをやったらしい。俺は近くのクラスメイトに尋ねる。

「何があった？」

「ああ、月島が他の女子と会話している時に、急に酒井が彼女の髪に触れたんだとさ」

「それで怒ることか？」

「あいつは変なところ潔癖だからな。きつと誰にも触らせないだろうさ」

月島とはボス格の名前だが、たかが髪の毛くらいで怒ることがあるだろうか。変な女だ。

それに、智美が生きている人に接触したのも気になる。一体何が

あつたのだろう。

「……そこに………いるの……」

「何を変なこと言ってるの！ 気持ち悪い！」

二度目の気持ち悪い。しかし、智美はそれを気にすることなく彼女の髪に手を伸ばす。間違いない。彼女には見えているのだ、月島に取り憑いている霊が。

「触れないで！！」

智美の手は勢いよく月島に弾かれた。

「私に触れるな！ 汚らわしい！！」

そう言つて、彼女は生徒の輪を眼力でこじ開け、廊下へと出て行く。その後に残されたのは、智美を見る、蔑む様な視線。

その中央で、智美はやがて視線を床に向けて、ただそこに佇んでいた。

「……とも………み……」

やがて野次馬がいなくなるにつれて、彼女の姿がはつきりと映る。初めて見た。彼女が寂しそうな表情で、俯いているのを。

見るに耐えられなくなつて、俺は彼女の手を取つた。

「ちよつと来い」

首を傾げる智美だったが、そんなことはお構いなしに俺は彼女の手を引く張る。クラスメイトのまわりつくような視線から逃れるように、俺は教室を出た。

「……授業は？」

「今はそれどころじゃない」

授業なんか気にする場合じゃないだろう。何であれだけひどいことを言われながらお前は授業の心配が出来るんだ。

分からない。お前は一体何なんだ。

とにかく、今は誰の目もつかないところに行く必要がある。普段他に干渉しない智美が干渉しようと思つたのだから、霊関係でよほどのことがあつたのだろう。

俺は彼女の手を引きながら、全力で例の屋上へと向かった。

「それで、何があった？」

屋上の中央ほどに来たところで、俺は智美の方を向く。彼女の視線はすでに俺になく、虚空をさまよっている。エリザベスといったか、きつと霊が彼女に近づいてきているのだろう。見えないから、確信はもてないが。

「それどころじゃねえ。おい智美、どうした？」

「……エリザベスが」

「そうか、ってそうじゃねえよ！」

何でこんな漫才調になってる！ それより、たった今まで俯いていた智美は何故もいつものように淡々としている？

それを尋ねると、智美は虚空で指を細かく動かしながら答える。

「……霊が、私の友達だから……」

多分、多分だけど、きつとエリザベスの他にも霊がいて、智美を慰めているのだろう。智美にとって霊とは、決して忌むべきものじやなくて、それこそ本当の友達のように、互いに慰め合っている仲なのだろう。そんな友達がない俺にとって、それは少し羨ましかった。

「それで、あの時に何があったんだ？」

「あの時？」

「ごまかすな。見てたから」

智美は少し俯いて、それからそのまま口を開いた。

「あの時、月島さんに、井上さんが近づいて……」

「井上さん……」

そんな人、俺のクラスにいたのだろうか。

「教室で、畑田君に『死ね』って、言った人」

「ああ、霊か……」

井上さんと言うのか、あの話を通じなかった霊は。

「それで、月島さんの首を絞めようとした井上さんに『ダメだよ』」

って」

当然、月島に井上さんの姿は見えない。だから、智美が奇行を働いているようにしか見えなかっただろう。

結局、誰が悪いつてわけでもなくて、色々なすれ違いが生じた結果だったのだ。

「辛かったか、彼女に手を弾かれて……」

智美は首を左右に振る。

「それは、別に……」

「じゃあ何で俯いていたんだ？」

「……………井上さんが、もう許さないって。殺すって。だから……………」
背筋が凍ったような衝撃が俺を襲う。じゃあ、月島の身が危ないんじゃないか？

「大丈夫。エリザベスが止めたから」

急いで階下に降りていこうとした俺を彼女は呼び止める。

「井上さんも、落ち着きを取り戻したから……………」

振り返ると、そこにはぎこちない笑みを浮かべた智美がいた。

「でもね、何でだろ……………」

やがて、彼女の目尻から一滴が頬を伝って軌跡を描く。

「私って、友達作れないのかな……………」

初めて見た。こんな感情を表に出した智美を。俺はすぐにでも何かを言うべきであつたが、残念なことに言葉が見つからない。俺は何を言えばいいのか。

「悲しくなんて、ない」

俺に心配をかけまいとしているのか、智美が涙声でそう告げる。しかし、そうやって強がっている方がかえって俺は心配だった。

「……………大丈夫。寂しくなんて、ないから……………」

「……………強がるなよ」

ようやくして出た言葉がそれだった。そして俺は、右手で彼女の

頭を胸元に寄せる。

「作れるよ。これだけ他人のことを思っているんだ。絶対に作れる」
一言出てしまえば、あとはすらすらと言葉が出てきた。

「それにさ、作れなかったとしても……」

胸に顔を当てて泣く智美に俺は告げた。

「俺がいるだろ」

何をクサイこと言ってるんだ俺は。だけど、それで智美の涙が止まるのだったら十分だ。他に誰かが聞いているわけでもあるまいし、ところが、智美は俺の予想とは反する反応をした。

「……嫌」

「えっ？」

「友達なんかじゃ、いや」

何を言っているんだこいつは？ 今さっき友達がなんとかって言うてただろ。

「俺が友達だつて」

「嫌なの、友達じゃ！」

今までに聞いたことのないくらい大きな声で智美が叫んだ。

「それ以上の関係じゃ、ダメなの？」

まさか、智美からその言葉を聞くことになるとは思わなかった。

彼女は胸に押し付けていた顔を上げて、まだ涙を溜めながら俺を見つめている。

俺に選べというのか。ならば答えは決まっている。

彼女は周りが思っているほど変な人間なんかではない。ただ、霊が見えて、霊と会話して、霊の友達がいるだけの、内気の少女だ。そんなどこか儚げな少女を、守ってやれる奴が必要だろう。

そして、あの教室であれが出来る人物は誰か。

答えは一つ。

俺だけだろ。

俺は右手に加えて左手を彼女の背中に回し、抱き寄せる。

「いいよ。喜んで」

彼女は再び俺の胸の中で泣き始めた。だけど、その涙の質は明らかに先程のものとは違うものだった。

その日以降、智美は少しずつではあるが、人が変わって明るくなった。

何事も積極的にするようになり、そのおかげで徐々に友達も増えつつあるようだ。

それが俺の言葉添えが原因であつたら嬉しく思う。

しかし、友達が増えていても彼女は時々近くの霊やエリザベス、井上さんと会話（つまり、虚空と会話）している。

だけど、それでいいのだ。それが、俺の惚れた智美なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3971f/>

変質恋愛白書

2010年10月28日06時30分発行